

死屍を食う男

葉山嘉樹

青空文庫

いろんなことを知らないほうがいい、と思われることがあなた方にもよくあるでしょう。

フト、新聞の「その日の運勢」などに眼がつく。自分が七赤しちせきだか八白はっぱくだかまるつきり知らなければ文句はないが、自分は二黒こくだと知っていれば、旅行や、金談はいけない、などとあると、構わない、やっつけはするが、どこか心の隅すみのほうにそいつが、しつっこくくつついている。

「あそこの家の屋根からは、毎晩人魂ひとたまが飛ぶ。見た事があるかい？」

そうになると、子供や臆おくびよう病びょうな男は夜になるとそこを通らない。

このくらいのことなんでもない。命をとられるほどのことはないから。

だが、見たため、知ったために命を落とす人が多くある。その一つの話を書いてみましょう。

その学校は、昔は藩の学校だった。明治の維新後県立の中学に変わった。その時分には県下に二つしか中学がなかったので、その中学もすばらしく大きい校舎と、兵営のような寄宿舎とを持つほど膨張した。

中学は山の中にあつた。運動場は代々木の練兵場ほど広くて、一方は県社〇〇〇神社に続いており、一方は聖しょうとく徳太子の建こんり

立ゆうにかかるといわれる国分寺こくぶんじに続いていた。そしてまた一方は湖になっていて毎年一人ずつ、その中学の生徒できしが溺死するならわしになっていた。

その湖の岸の北側には屠殺場とぎつがあつて、南側には墓地があつた。学問は静かにしなければいけない。ことの標本でもあるように、学校は静寂な境に立っていた。

おまけに、明治が大正に変わろうとする時になると、その中学のある村が、栓せんを抜いた風呂桶ふろおけの水のように人口が減り始めた。残っている者は旧藩の士族で、いくらかの恩給をもらっている廃は吏いりばかりになった。

なぜかなら、その村は、殿様が追い詰められた時に、逃げ込ん

で無理にこしらえた山中の一村であつたから、なんにも産業というものがなかつた。

で、中学の存在によつて繁榮を引き止めようとしたが、困つたことには中学がその地方十里以内の地域に一度に七つも創立された。

だいたい今まで中学が少な過ぎたために、県で立てたのが二つ、その当時、衆議院議員選挙の猛烈な競争があつたが、一人の立候補が、石炭色の巨万の金を投じて、ほとんどありとあらゆる村に中学を寄付したその数が五つ。

こんなわけで、今まで七人も一つ部屋にいた寄宿生が、一度に二人か三人かに減つてしまった。

その一つの部屋に、深谷ふかやというのと、安岡やすおかと呼ばれる卒業期の五年生がいた。

もちろん、部屋の窓の外は松林であつた。松の梢こずえを越して国分寺の五重の塔が、日の光、月の光に見渡された。

人数に比べて部屋の数が多過ぎるので、寄宿舎は階上を自習室にあて、階下を寢室にあててあつた。どちらも二十畳ほど敷ける木造西洋風に造つてあつて、二人では、少々淋さびしすぎた。が、深谷も安岡も、それを口に出して訴えるのには血氣盛んに過ぎた。

それどころではない、深谷はできることならば、その部屋に一人でいたかつた。もし許すならばその中学の寄宿舎全体に、たった一人でいたかつた。

何かしら、人間ぎらいな、人を避け、一人で秘密を味わおうという気振りが深谷にあることは、安岡も感じていた。

安岡は淋しかった。なんだか心細かった。がもう一学期半辛抱すれば、華やかな東京に出られるのだからと強いて独り慰め、鼓舞していた。

十月の末であった。

もう、水の中に入らねばしのげないという日盛りの暑さでもないので、夕方までグラウンドで練習していた野球部の連中が、泥と汗とを洗い流し、且つは元気をも誇るために、例の湖へ出かけて泳いだ。

ところがその中の一人が、うまく水中に潜って見せたが、うま

く水上に浮かび上がらなかつた。あまり水裡すいりの時間が長いので、賞賛せんぽうの声、羨望せんぼうの聲が、恐怖の叫びに変わった。

ついに野球のセコチャンが一人溺死できしした。

湖は、底もなく澄みわたった空を映して、魔の色をますます濃くした。

「屠牛とぎゅう所の生き血ちけの崇りたがあ湖にはあるのだろう」

一週間ぐらいは、その噂うわさで持ち切っていた。

セコチャンは、自分をのみ殺した湖の、蒼黒あおくろい湖面を見下ろす墓地ぼだいに、永劫えいせつに眠った。白い旗が、ヒラヒラと、彼の生前を思わせる応援旗のようにはためいた。

安岡は、そのことがあつてのちますます淋さびしさを感じるように

なつた。部屋が広すぎた。松が忍び足のようになつた。国分寺の鐘が陰いんにこもつて聞こえてくるようになった。

こういつたふうな状態は、彼をやや神経衰弱に陥れ、睡眠を妨げる結果に導いた。

彼とベッドを並べて寝る深谷は、その問題についてはいつも口を緘かんしていた。彼にはまるで興味がないうように見えた。

どちらかといえば、深谷のほうがこんな無気味な淋しい状態からは、先に神経衰弱にかかるのが至当であるはずだった。

色の青白い、瘠やせた、胸の薄い、頭の大きいのと反比例に首筋の小さい、ヒョロヒョロした深谷であつた。そのうえ、なんらの事件のない時でさえ彼は、考え込んでばかりいて、影の薄い印象

を人に与えていた。だが、彼はベッドに入ると直ぐに眠った。小さないびき躰さえかいて。

安岡は、ふだんおくびよう臆病 そうに見える深谷が、グウグウ眠るのに腹を立てながら、十一時にもなれば眠りに陥ることができた。

セコチャンが溺死して、一週間目の晩であつた。安岡はガサガサと寝返りを三時間も打ち続けたあげく、眠りかけていた。が、まだ完全には眠つてしまわないで、夢の初めか、現うつの終わりかの幻を見ていると、フト彼の顔の辺りに何かを感じた。彼の鋭くかつた神経は針でも通されたように、彼を冷たい沼の水のような現実に立ち返らせた。が、彼は盗どろぼう棒に忍び込まれた娘のように、本能的に息を殺したただけであつた。

やがて、電燈のスイッチがパチツと鳴ると同時に部屋が明るくなった。深谷が寝台から下りてスリツパを履いて、便所に行くらしく出て行つた。

安岡の眼は冴^さえた。彼は、何を自分の顔の辺りに感じたかを考へ始めた。

——人の息だつた。体温だつた。だが、この部屋には深谷と自分とだけしかない。深谷がおれの寢息をうかがうわけがない。万一、深谷がうかがつたにしたところで、もしそうなら電燈のついた時彼が寝台の上にいるはずがない。そしてあんなに大つぴらに、スリツパをバタバタさせて出てゆくはずがない。第一、なんのために深谷がおれの寢息なんぞうかがう必要があるのだ！ お

れは神経衰弱をやっているんだ。幻だ。夢だ。錯覚なんだ！——
こう思つて彼は自分自身を納得させて、再び眠りに入ろうと努
めた。

深谷はすぐに歸つてきて、電燈を消した。そしてベッドに入る
と、間もなくかすかないびき鼾さえ立て始めた。

安岡は自分の頭が変になつていて、感ずることを感じて、眼をつむつて、
息を大きくして、頭の中で数を数え始めた。

一、二、三、四、

五十一、五十二、

四百、四百一、四百二、

千二百十、千二百十一、千二百十二、

彼のやや沈静した頭が、千二百十二を数え終わつた時、再び彼は顔の辺りに、人間の体温を感じた。が、彼はこんどはいきなり冷水をぶっかけられたように、ゾツとしはしたが千二百十三、千二百十四と、数珠じゆずをつまぐるように数え続けた。そして身動き一つ、睫毛まつげ一本動かさないで眠りを装よそおつた。

電燈がパツと、彼の瞼まぶたを明るく温めた。

再び彼の体を戦せんりつ慄りつがかけ抜け、頭髮に痛さをさえ感じた。

電燈がパツと消えた。

深谷が静かにドアを開けて出て行つた。

——奴やつは恋人でもできたのだらうか？——

安岡は考えた。けれども深谷は決して女のことなど考えたり、

まして恋などするほど成熟しているようには見えなかった。むしろ彼は発育の不十分な、病身で内気で、たとい女のほうから言い寄られたにしても、けんお嫌悪の感を抱くいだくらいな少年であった。器械体操では、かなぼう金棒にしりあ尻上がりもできないし、木馬はその半分のところまでも届かないほどの弱々しきであった。

安岡は、次から次へと深谷のことについて考えたが、どうしても、彼が恋人を持っているとは考えられなかった。それなら……盗癖でもあるのだろうか？

だが、深谷は級友中でも有数の資産家の息子であった。それにして盗癖は違う。いくら不自由をしない家の子でも、盗癖ばかりは不可抗的なものだ。だが、盗癖ならばまず彼がその難をこう

むるべき手近にいた。且つ^か近来、学校中で盗難事件はさらになかった。

下痢かなんかだろう。

安岡はそう思つて、眠りを求めたが眠りは深谷が連れて出でもしたように、その部屋の空気から消えてしまった。

おそらく、二時間、あるいは三時間もたつてから深谷は、すき間から忍び入る風のように、ドアを開けて帰つてきた。

部屋へ入ると、深谷はワザと足音を高くして、電燈のスイッチをひねった。それから寝台へもぐり込む前に電燈を消した。

安岡は研ぎ出された^{はくじん}白刃^{はくじん}のような神経で、深谷が何か正体をつかむことはできないが、^{せいさん}凄惨な空気をまとつて帰つたことを

感じた。

——決闘をするような男じゃ、絶対にないのだが。——

安岡は、そんな下らないことに頭を疲らすことが、どんなに明日の課業に影響するかを思って、再び、一二三四と数え始めた。が、彼が眠りについたのは、起きなければならぬ一時間前であった。

その次の夜であった。

安岡は前夜の睡眠不足でひどく疲れていたの、自習をいかにげんに切り上げて早く床に入った。そして、妙な素振りをする深谷の来る前に眠っちまおうと決心した。

「でなけりや、とてもやり切れない」

と思った。だが、そう思えば思うほど、なおさら寝つかれなかった。部屋が、そして寄宿舎全体が淋^{さび}し過ぎた。おまけに、なんだか底の知れない泥沼に踏み込みでもしたように、深谷の挙動が疑われ出した。

深谷はカツキリ、就寝ラツパ——その中学は一切をラツパでやった——が鳴ると同時にコツコツと、二階から下りてきた。

安岡は全く眠ったふうを装った。が、眠れもしないのに眠ったふうを装うことは、全く苦しいことであつた。だが、何かしら彼の心の底で好奇心に似た気持ち^が、彼にその困難を堪えしめた。

深谷は、昨夜と同じく何事もないように、ベッドに入ると五分もたたないうちに、軽い躰^{いびき}をかき始めた。

「今夜はもう出ないのかしら」と、安岡は失望に似た安堵あんどを感じて、ウトウトした。

と、また、昨夜と同じ人間の体温を頬ほおの辺りに感じた。

「確かに寝息をうかがってるんだ！」

だが、彼は今までどおりと同じ調子の寝息を、非常な努力のもとに続けた。

パツと電燈がついた。そのまま深谷のスリツパがパタパタとドアのほうに動いた。が、深谷はドアの前でそれを開くと、そのまま振り返って、安岡のほうをジーツとみつめた。その顔の表情はなんともいえない凄すこいものであった。死を決した顔！ か、死を宣告された顔！ であつた。

彼は安岡が依然のままの寝息で眠りこけているのを見すますと、
こんどは風のように帰ってきて、スイッチをひねらないで電球を
ねじって灯を消した。
あかり

そうして開けたドアから風のように出て行った。

安岡はそれを感じた。すぐに彼は静かに上半身を起こして耳を
澄ました。

木の葉をわたる微風のような深谷の気配が廊下を感じられた。
彼はやはり静かに立ち上がると深谷の跡をつけた。

廊下に片っ方の眼だけ出すと、深谷が便所のほうへ足音もなく
駆けてゆく後ろ姿が見えた。

「ハテナ。やっぱり下痢かな」

と思ううちに、果たして深谷は便所に入った。が安岡は作りつけられたように、片っ方の眼だけで便所の入り口を見張り続けた。深谷は便所に入ると、ドアを五分ぶばかり閉め残して、そのすき間から薄暗い電燈に照らし出された、ガラんとした埃ほこりだらけの長い廊下をのぞいていた。

「やつぱり便所だったのか。それにしてはなんだって人の寢息なんぞうかがいやがるんだろう。妙な奴やつだ」

と、安岡が五分間ばかり見張りにしびれを切らして、ベッドのほうへ帰ろうとする瞬間、便所のドアが少しずつ動くのを見た。ドアは全く音もなく、少しずつ開ぶき始めた。

深谷の姿はドアがほとんど八分目ぶどころまで開いたのに見えな

かった。まるでドアが独りでに開いたようだった。安岡はゾツとした。

と、深谷の姿が風のように廊下に飛び出して、やにわに廊下の窓から校庭に跳び出した。

安岡の体を戦慄せんりつがかけ抜けた。が次の瞬間には、まるで深谷の身軽さが伝染しでもしたように、風のように深谷の後を追った。深谷は、寄宿舎に属する松林の間を、忍術使いでもあるように、フワフワとしかも早く飛んでいた。

やがて、代々木の練兵場ほども広いグラウンドに出た。

これには安岡は困った。グラウンドには眼をさえぎる何物もない。曇っていて今にも降り出しそうな空ではあったが、その厚い

空の底には月があつた。グラウンドを追つかければ、発見されるのは決まりきつたことであつた。

が、風のように早い深谷を見失わないためには、腹這つてなぞ行けなかつた。で、彼はとつさの間に、グラウンドに沿うて木柵くによつて仕切られている街道まで腹這いになつて進んだ。

街道に出ると、彼は木柵を盾たてにして、グラウンドの灰色の景色をながめた。その時にはもう深谷の姿は見えなかつた。彼は茫ぼうぜ然んとして立ちつくした。なぜかならいくら風のように速い深谷であつても、神通力じんつうりきを持つていないかぎり、そんなに早くグラウンドを通り抜け得るはずがなかつたから。

「奴も腹這いになつて、障害物のない所で見張つてやがるんだな」

安岡は、自分自身にさえ気取られないように、木柵に沿うて、グラウンドの塵ちり一本さえ、その薄うす闇やみの中に見失うまいとするようにして進んだ。

やや柵の曲がった辺へ来ると、グラウンドではなく、街道を風のように飛んでゆく姿が見えた。

その風の姿は、一週間前、セコチャンが溺死できしした沼のほうへと飛んだ。

安岡は、自分が溺死しかけてでもいるような恐怖にとらわれ、戦せん慄りつを覚えた。が、次の瞬間には無我夢中になって、フツ飛んだ。

道は沼に沿うて、蛇へびのように陰鬱いんうつにうねっていた。その道の

上を、生きた人魂ひとたまのように二人は飛んでいた。

沼の表は、曇った空を映して腐屍ふしの皮膚のように、重苦しく無気味に映って見えた。

やがて道は墓地の辺にまで、二人の姿を吹くように導いた。

墓地の入り口まで先頭の人影が来ると、吹き消したように消えてしまった。安岡は同時に路面へ倒れた。

墓地の松林の間には、白い旗や提ちようちん灯が、巻かれもしないでブラツと下がっていた。新しいのや中ちゆうぶる古そとうぼの卒塔婆などが、長い病人の臨終を思わせるように瘠やせた形ぎようそう相で、立ち並んでいた。松の茂った葉と葉との間から、曇った空が人魂のように丸い空間をのぞかせていた。

安岡は這うようにして進んだ。彼の眼をもしその時だれかが見たなら、その人はきつと飛び上がったて叫んだであろう。それほど彼は熱に浮かされたような、いわば潜水服の頭についているのと同じ眼をしていた。

そして、その眼は恐るべき情景を見た。

それは筆紙に表わし得ない種類のものではあつた。

深谷は、一週間前に溺死^{できし}したセコチャンの新仏の廓^{かくない}内にいた

！

彼のどこにそんな力があつたのであろう。野球のチャンが二人でようやく載つけることができた、仮の墓石を、深谷のヒヨロヒヨロな手が軽々と持ち上げた。

その石をそばへ取り除けると、彼は垣根かきねの生け垣の間から、鍬くわのこぎりと鋸とを取り出した。

鍬は音を立てないように、しかしめまぐるしく、まだ固まり切らない墓土を撥ね返した。

安岡の空くうな眼はこれを見ていた。彼はいつの間にか陸から切り離された、流氷の上にいるように感じた。

深谷は何をするのだろうか？ そんなにセコチャンと親密ではなかった。同性愛などとは思ってもよらない仲であった。ほとんど一度も口さえ利いたことはなかった！

軟らかい墓土はそばに高く撥ねられた。そして棺ひつぎの上はだんだん低くなつた。深谷の腰から下は土の陰に隠れた。

キー、キー、バリツ、と釘くぎの抜ける音がした。鋏で、棺ふたの蓋ふたをこじ開けたらしかった。

深谷の姿は、穴の中にかがみ込んで見えなかった。

が、鋸が、確かに骨を引いている響きせきりが、何一つ物音のない、かすかな息の響きさえ聞こえそうな寂せきり寥ようを、鈍くつんぎつんぎしていた。

安岡は、耳だけになっていた。

プツツ！ と、鋸の刃が何か柔らかいものにぶつつかる音がした。腐屍ふしの臭においが、安岡の鼻を鋭く衝ついた。

生け垣の外から、腹はらば這はいになって目を凝こらしている安岡の前に、おもむろに深谷が背を伸ばした。

彼は屍骸しかいの腕を持つていた。そして周りを見回した。ちようど犬がするように少し顎あごを持ち上げて、高鼻あしを嗅かいだ。

名状しがたい表情が彼の顔を横切った。とまるで、恋人の腕にキツスでもするように、屍しかばねの腕うでへ口を持つて行つた。

彼は、うまそうにそれを食い始めた。

もし安岡が立っているか、うづくまつているかしたら彼は倒れたに違ちがいなかつた。が、幸いにして彼は腹這はらつていたから、それ以上に倒れることはなかつた。

が、彼は叫ぶまいとして、いきなり地面に口を押しつけた。土にはまるでそれが腐屍ふしでもあるように、臭気におがあるように感じた。彼はどうして、寄宿舎に帰つたか自分でも知らなかつた。

彼は、口から頬ほおへかけて泥だらけになって昏々こんこんと死のように眠った。

朝、深谷は静かに安岡の起きるのを待っていた。

安岡は十一時ごろになって死のような眠りからよみがえった。

不思議なことには深谷も、まだ寢室にいた。

安岡が眼を覚ましたことを見ると、

「君の欠席届は僕が出しておいたよ。安岡君」と、深谷が言った。

「ありがとう」安岡はしまいまで言えなかった。

「きみは、昨夜、何か見なかったかい？」と、深谷が聞いた。

「いいや。何も見なかった」安岡の語尾は消えた。

「きみの口の周りは、まるで死しかばね屍でも食ったように、泥だらけだよ。洗ったらいいだろう。どうしたんだね」

深谷が、静かに言った。

が、その顔には、鬼気があふれていた。

それつきり、安岡は病気になってしまった。その五、六日後から修学旅行であった。

深谷は修学旅行に、安岡は故郷に病を養いに帰った。

安岡は故郷のあらゆる医師の立ち会い診断でも病名が判然しなかった。臨終の枕ちんとう頭の親友に彼は言った。

「僕の病源は僕だけが知っている」

こう言つて、切れ切れな言葉で彼は屍しかばねを食うのを見た一場じょうを物語つた。そして忌まわしい世に別れを告げてしまった。

その同じ時刻に、安岡が最期の息を吐き出す時に、旅行先で深谷が行方不明になつた。

数日後、深谷の屍骸しかがいが渚なぎさに打ち上げられていた。その死体は、大理石のように半透明であつた。

青空文庫情報

底本：「ひとりで夜読むな 新青年傑作選 怪奇編」角川ホラー
文庫、角川書店

1977（昭和52）年10月15日初版発行

1980（昭和55）年10月25日6版発行

2001（平成13）年1月10日改版初版発行

初出：「新青年」

1927（昭和2）年4月号

入力：網迫、土屋隆

校正：山本弘子

2008年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死屍を食う男

葉山嘉樹

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>